

## アフリカポレポレ

(ゆっくり,のんびり)

アニマルフォトグラファー  
トラベルライター

平 岩 雅 代

アフリカの広大な草原(サバンナ)に暮らす野生動物たちに魅せられ、赤道直下の国ケニアを“第2の故郷”と決め込み、旅行ならぬ“里帰り”をするようになり、早や18年の歳月が過ぎてしまいました。

そもそものアフリカとの出会いは、22年前のことでした。4つの肩書き(海外旅行評論家、写真家、切手評論家、著述家)を持ち、世界各地を取材して回っている父・¥1岩道夫が、現地で撮影してきた写真を見たのがきっかけでした。

当時 BOAC と呼ばれていた英国航空(現在のブリティッシュ・エアウエイズ)が、東京の羽田空港からケニアの首都ナイロビのエンバカシ空港まで、定期直行便を就航させたのが、1972年のこと。父はその記念すべき第1便に、日本からジャーナリスト代表のひとりとして招かれ、半月にわたってケニア、ウガンダ、タンザニアの、東アフリカ3ヵ国を訪れたのです(残念ながらこの直行便は時期が早すぎたようで、すぐに廃止されてしまいました)。)

まだ小学生だった私は、旅行から戻った父から旅の土産話を聞くのが、大好きでした。

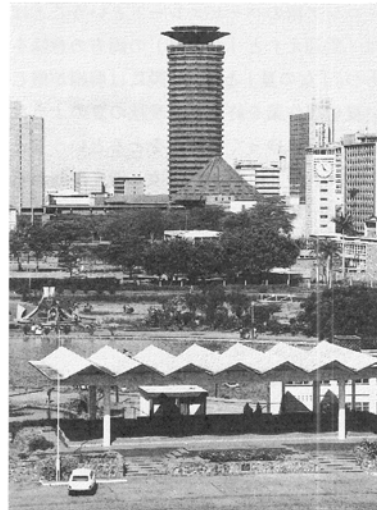


写真1 ケニアの首都ナイロビ市街  
(中央の円形ビルは国際会議場)

生まれて初めて聞く東アフリカの国々の話に心をときめかせ、未だ見ぬ遙か遠いサバンナに思いを寄せ、幼な心にアフリカ訪問を夢見たものです。

現代でも一般的な日本人のアフリカに対するイメージは、残念なことに非常に片寄ったものでしかありません。

アフリカ大陸が日本の約80倍もの大きさであることを、またその中に53もの国があることを、いったいどれくらいの日本人が正確に答えられるのでしょうか？

赤道直下のアフリカは、きっと暑いに違いない—という想像も、実は大きな誤解です。

例えばケニアの首都ナイロビは文字通り赤道直下に位置していますが、海拔が1,700m という高原のため、一年中夏の軽井沢のように爽やか……。汗をかくこともまずありません。連日最高気温が30度以上、40度近くまで上昇した今年の日本の夏のほうが、よっぽど“酷暑”です。

日本では最も暑い季節の8月に現地へ出かけますと、まさに爽やかな秋晴れ。青い空に白い雲がポツカリと浮かび、360度見渡す限り続くサバンナでは、ライオンやチーター、ゾウ、キリン、シマウマなどの家族や群れが思い思いにくつろいでいる、まさに楽園のような光景が目の前に広がります。

ナイロビ市街には高層建造物が建ち並び、ほんとうにアフリカにやって来たのかどうか、錯覚してしまうほど。ナイロビから数百キロも離れた、サバンナのまん中にポツンと建てられた風情のロッジでも、客室には清潔なシーツが掛けられたベッドと熱いシャワーが完備しているばかりか、新鮮な果物をはじめ香ばしいトースト、卵料理、そして特産の美味しいコーヒーや紅茶が、朝の食卓に並びます。

現地では“国立公園”(ナショナル・パーク)や、“動物保護区”(ゲーム・リザーブ)と呼ばれている大自然の草原に人間が“車”という濫に入って「お邪魔させていただき、主役である野生動物の生活を拝見する」というスタイルです。勝手に車から降りて歩くことは、厳禁です。相手は野生動物なのですから……。



写真2 木登りチーター  
(世界的に珍しい作品)

最近、ややもすれば人間の世界において家族の団らん、親子の愛情が薄れがちだ、といわれていますが、厳しい自然の中で真剣に生きている野生動物の姿を見ていると、彼らから教えられることが少なくありません。

私の18年間の“里帰り”でケニア訪問は50余回になりました。今では動物の子どもが生まれる2~3月と、動物の大移動のシーズンの8~9月を中心に年6回の「平岩アフリカツアー」を実施、全国各地の皆さんと一緒にアフリカの素晴らしさを体験しています。

この経験を通して出会ったさまざまな野生動物の素顔を、次号からご紹介してまいります。どうぞお楽しみに……